

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

カルヴィーノとアーティチョーク⑬

堤 康徳

ノーベル生理学・医学賞を受賞した京都大学の山中伸弥教授の京大での会見で、教授の背後に掲げられたパネルのマークが目についた。それは、青々と茂る一本の木が円の中に描かれた、京大のエンブレムだった。吉田キャンパス時計台前のクスノキが図案化されたものだという。

クスノキ(楠、樟)の枝葉から作られる樟脳は、防虫剤、医薬品として使用される。カンフル剤のカンフルとは、樟脳のことだ。イタリア語でも樟脳は canfora (カンフォラ)、クスノキはその男性形 canforo である。京大のシンボルともいえるクスノキが医学にかかわりのある木だと知って、山中教授のノーベル生理学・医学賞受賞がよけいに意義深く思われてきた。

名前に楠の一字を授かった生物学者、民俗学者の南方熊楠も、和歌山県田辺市の自宅の庭にあったクスノキを大切に、日常生活におけるその恩恵や効能について熱心に語っているという(小峯和明「巨樹の風景」『図書』2012年9月号、岩波書店、p.57)。

本連載の第11回(2012年10月号)で、カルヴィーノの『木のぼり男爵』をとりあげた。舞台は、18世紀のリグーリア地方。12歳のときに庭のトキワガシの木に登ってから死ぬまで樹上生活を続けた主人公コジモの数奇な生が描かれている。そこには、さまざまな樹木が登場するが、クスノキの

名はない。18世紀のイタリアにはまだ、クスノキが存在しなかったからだろう。東アジア原産のクスノキが、イタリアで初めて植樹されたのは19世紀になってからのようだ。1820年に、マッジョーレ湖に浮かぶベッラ島のボッロメーオ宮殿庭園に植樹されたという記録が残っているらしい(Wikipedia イタリア語版の *Cinnamomum camphora* の項目を参照)。



【京都大学のエンブレム】

『木のぼり男爵』が、自然との幸福な関係を基に主人公がユートピアを建設する物語であるとすれば、同じ年に発表された『建設投機』は逆に、住宅を建設することによって自然環境が破壊され、ユートピアとしての故郷が失われる物語だともいえるだろうか。自然と人間の関係に焦点を当てたこの二作品は、いずれも1957年に発表されてい

るが、ほぼ同じ時期に同じ問題意識をもってカルヴィーノが書いた興味深い論考がある。『水に流して——文学・社会評論集』（翻訳は朝日新聞社刊）に収録された、「小説における自然と歴史」*Natura e storia nel romanzo*である。このテキストは、もともと、1958年3月にサン・レモで行われた講演のために用意されたものだ。カルヴィーノは、この論考の意図を、「19世紀の小説をたんに、個人と社会の闘争、あるいは少なくとも両者の関係を主題とする社会小説として定義しがちな、今日広く普及した限定的評価を訂正することにある」（*Una pietra sopra. Discorsi di letteratura e società*, Einaudi, 1980, p. 24）と説明する。

カルヴィーノは、人間と歴史（社会）という二つの要素に、自然という要素を加えた三つの観点から小説を分析する必要性を説く。カルヴィーノによれば、『ロビンソン・クルーソー』という18世紀の偉大な叙事詩から発展した冒険小説や、『白鯨』のような形而上学的小説だけが、人間と自然の関係を描いているとみなされがちだが、けっしてそうではなく、「自然の要素はあらゆる偉大な小説家につねに存在する」のである（*ibid.*）。

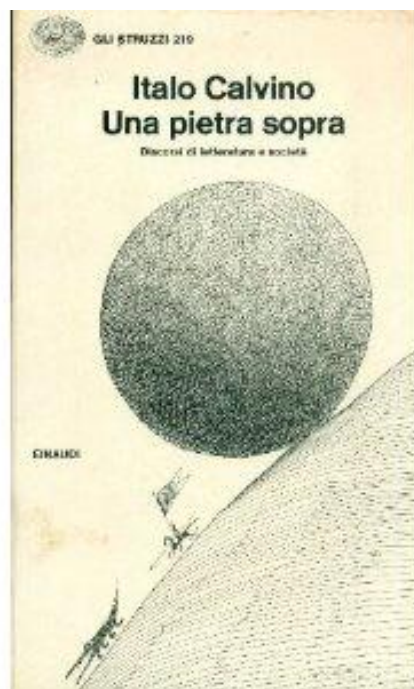
注目したいのは、カルヴィーノがこの論考を、トルストイの『戦争と平和』の引用から始めていることだ。カルヴィーノが引用した箇所（第三部第二篇）には、1812年のボロジノの戦いに参加したアンドレイ公爵の、戦闘前夜と戦闘のさなか、そして負傷して運ばれた白樺林の包帯所における姿が描かれている。それは、公爵の心理描写が風景の描写と密接に関わり、死に対する恐怖、生への執着が、彼の目にする自然によって喚起される場面である。そこでは、とりわけ白樺の林の存在感が圧倒的である。カルヴィーノによる引用はかなり長いので、戦闘前夜の場面のみここに掲載しよう。なお、訳文はすべて『戦争と平和（三）』（米川正夫訳、岩波文庫、1987年）に依った。

アンドレイ公爵はこの八月二十五日の晴れやかな夕方、連隊駐屯地のいちばんはずれにあたっている、クニャジコーヴォ村のこわれた納屋の中で、肘づえついて横になっていた。そして塙にそって並んでいる下枝を切られた樹齢三十年ぐらいの白樺の木立ちや、燕麦の束の散らばっている畑や、焚火（それは兵士の炊事場でもあった）

の煙が立ち迷う灌木の茂みなどを、こわれた壁の隙間から眺めていた（*Ibid.*, p. 19. 『戦争と平和（三）』p. 319）。

彼は明日の戦闘が今まで参加した多くの戦いのうちで、もっとも恐ろしいものに相違ない、ということを知っていた。今度こそ死ぬかもしれないという想念が、生まれてはじめて端的に、恐ろしく、まざまざと、ほとんど正確無比なことのよう、彼の心に浮かんできた（*Ibid.* 同書 p. 320）。

彼は太陽に輝く白樺の並木、——じっと動かない黄や緑の葉と、白い皮を見つめた。『死ぬんだらうか……俺が殺されるのだらうか……明日……俺がこの世になくなるのだらうか……こういうものはみんなこのまま残って、俺一人だけこの世になくなるのだらうか。』彼は自分がこの世にいない場合をまざまざと想像した。するとこの白樺の木も、その光と影も、もくもくした雲も、焚火の煙も、——周囲にあるものがごとく形を変えて、何かしら恐ろしい威嚇のかけをおびてきたように思われた（*Ibid.*, pp. 19-20. 同書 p. 322）。



【Una pietra sopra（邦題：水に流して）表紙】

カルヴィーノはこれらの引用のあとに次のように読者（講演の聴衆）に問いかける。

トルストイのこれらの記述の何が、私たちをこれほど魅了するのでしょうか？ ここには、自己自身を認識し、自らの生の有限性を認識したひとりの人間がいます。そして、これまでも存在し、私たちがいなくなったあとも存在するであろう、個人を超えた生命の象徴としての自然があります。さらに、歴史があります。つまり、その流れと意味の探求があります。私たち個人の生活にたえず加わりながら、私たちの生活によって折り合わされてゆく歴史があります。

個人、自然、歴史。私たちが近代の叙事詩と呼ぶものは、これら三つの要素の関係によって成立しています。19世紀の偉大な小説がこの議論を始め、20世紀の小説は、より混乱した、とげとげしいかたちでそれを継承しています(Ibid.)。

文学作品において、個人、自然、歴史の三つの要素の関連性が最も深くダイナミックにあらわれた描写として、『戦争と平和』のカルヴィーノによる引用箇所以上にふさわしい例はまれであろう。たしかにこれらの場面に、私たち読者は深く魅了される。しかし、カルヴィーノ自身はどうだろう？ もしかすると彼は、むしろ、白樺の並木そのもの、その白い樹皮、黄や緑の葉に魅せられているのではないだろうか。ロシアの人々の生活と密接にかかわりながら、ときに彼らをやさしく包容し、ときに畏怖させる白樺は、ロシアの大地の象徴ともいえよう。また、温暖なリグーリアとは対照的なロシアの大地に根を張る白樺の木は、それ自身が、多様な地球の生態系の証であり、カルヴィーノが『木のぼり男爵』を執筆するさいに抱いていたと思われる、地表全体を覆うユートピア的な樹木のイメージを補完するものでもあったのではないか。

『戦争と平和』の白樺の並木から私が連想したのは、カルヴィーノの論考では言及されていないのだが、別の偉大な歴史小説における森の描写だ。そして、その小説を読んだことが中世史を志

すきっかけになったという歴史家のことだ。フランスの歴史家、ジャック・ル＝ゴフは、その著『中世とは何か』(池田健二・菅沼潤訳、藤原書店、2005年)を、次のように語り出している。

シェフィールドと愛すべきドンカスターの街の間には、絵のように美しい丘や谷間が点在しています。時は一一九四年、この丘や谷間の大部分を覆う広大な森の中で、二人の男が話し合っています。豚飼いのガースと道化のウォンバです。彼らは『アイヴァンホー』(一八八九)の読者が最初に出会う登場人物たちです。夢の世界に引き込まれるような光景です。ウォルター・スコットはその描写を楽しみます。

「森の中にぽっかりと空いたきれいな緑の空間に、一日の終わりの陽光が降りそそいでいた。

(……)ゆったりとした^{てっぺん}天辺とずんぐりとした丸い幹をもち、大きく枝を広げた、おそらくはローマの兵士たちの堂々たる行進も目にしたであろう樅の木々からは、魅惑的な緑の絨毯の上にも、節くれた無数の小枝が伸びていた。」

このようにして、一九三六年に私は中世を発見しました。私はトウロンに住む十二歳の少年でした。

ここで「樅」と訳されている oak は、現在は通常ナラと訳される。ヨーロッパには樹齢千年を超すナラ(檜)の巨木もある。古代ローマ軍の行進を目撃したこの小説のナラは、悠久の時間の流れのなかで、人間の営みを見守る歴史の証人なのである。

[図版の出典]

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/symbol/images/emblem/betuzu2.jpg>

<http://www.amazon.it/Una-Pietra-Sopra-Italo-Calvino/dp/B002F80JPM>

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑮』

～映画の中の自転車(前篇)～

谷口 和久

●「自転車が登場する映画は名作だ！」

自転車が効果的に使われている映画には、名作が多い。これはなにも筆者だけの個人的思い入れではない、と思いたい。

話の始めからイタリアからは離れるが、ステーブン・スピルバーグ監督の名作『E.T.』(1982)。クライマックスの逃走シーンや月をバックに空を駆け上がるシーンを覚えておられる方も多いだろう。想像してほしいのだが、もし少年たちが乗っていたのが、自転車ではなくて、車やオートバイ、あるいは馬などだったら、あれほどこころ惹きつけられるものがあっただろうか。



【『E.T.』より】

少年たちのひたむきさ、健気さ、仲間意識、大人たちに対するささやかな反抗。

レースで必死にペダルをこぐ選手たちにも、同様のことを感じて応援しているのかも。

●イタリア映画 不朽の名作たち

イタリア映画で自転車と言えば、まず思い浮かべるのは『自転車泥棒』Ladri di Biciclette (1948)。ネオレアリズモの名作ですね。まだご覧になったことがないという方のために簡単にあらすじを紹介すると、主人公は2年間も無職状態のお父さ

ん。妻と子1人あり。ようやく見つかった職は街頭ポスター貼りの仕事で、就職には自転車を持っていることが条件という。ところが、生活に困って自転車は質屋に入れてしまっており、窮状を妻に訴えると、妻はさっそく嫁入り道具だったシーツなどをかき集めて金を工面し、なんとか自転車を請け出すことができた。

初出勤の朝、息子が懸命に、父の大切な自転車を磨いている。その様子から、息子もその自転車をいかに愛していたかがわかる。

さっそく自転車で出勤し、街中で映画のポスター貼りの作業に取りかかる。ところが、ふとしたすきに虎の子の自転車を盗まれてしまう。あわてて追いかけたものの、相手は自転車、追いつくはずもなく、あっというまに見失ってしまう。

泥棒市を探し回ったり、犯人とおぼしき若者や、その若者と接触した老人を問い詰めるが、物的証拠をあげられず、途方に暮れてしまう。

サッカーで盛り上がるスタジアムの外で、歩道に親子二人してしゃがみこむが、ふと目をやると路には放置された自転車が…。よからぬことを思いついた父は、息子を先に帰し、自転車を盗って逃走をくわだてるが、すぐに気付いた持ち主や周囲の人間にあっという間に取り囲まれ、ポコポコにされてしまう。そこへ、電車に乗りそこねた息子がやって来て、泣きじゃくりながら父の手を取ると、自転車の持ち主もあわれに思ったか無罪放免とする。

生活の糧を失って、がっくりと肩を落とす父。そんな父に寄り添い、手を強く握りしめる息子。手をつないで、夕暮れの街を二人連れ立って家路につく。そして FINE (エンド)。

ところで、ささやかな小ネタをひとつ。サッカースタジアムの外でしゃがみこんでいる二人の前を一瞬、時間にして数秒でいどだが、ロードレーサーの団が通り過ぎるシーンがある。父が自転車を盗もうか逡巡している場面なのだが、展開に直接関係あるようには見えない。筆者としては、むしろ、サッカーを入れたので、もうひとつの国民的スポーツである自転車競技も入れようという、デ・シーカ監督の配慮(?)と思いたい。なんといっても、この映画が撮られた1940年代後半といえば、イタリア自転車史上最高の二人、バルタリ、コッピの全盛期だったのだから。

時代は下がって1989年、『ニュー・シネマ・パラダイス』Nuovo Cinema Paradisoでも自転車が登場する印象的なシーンがある。

ロシア戦線に送られたきり帰ってこない父を持つシチリアの少年トト。彼の楽しみは村唯一の映画館で映画を観ること。さらには、映画を観るだけではあき足らず、映写室にもぐりこんでフィルムをちょろまかしたり、映写技師のアルフレードにちょっかいを出したり。いたずらがすぎて、アルフレードにつまみ出されることもしばしばだ。

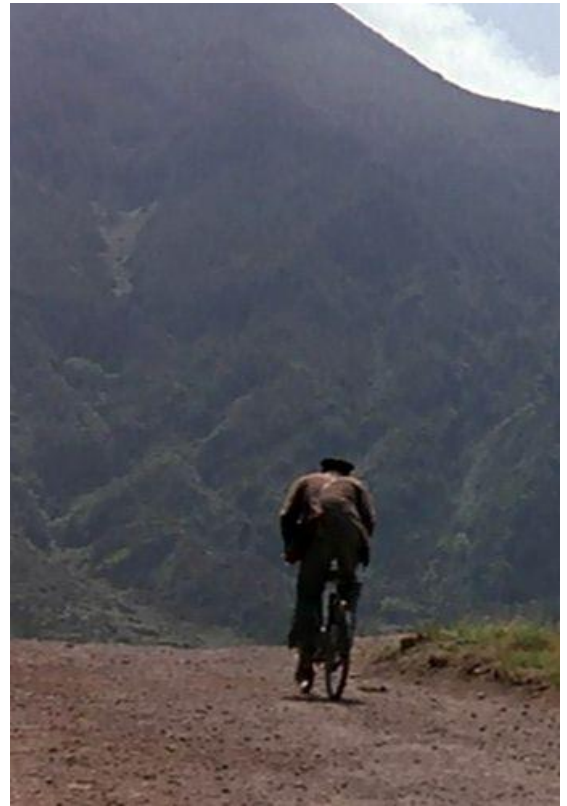


【『ニュー・シネマ・パラダイス』より】

ある日、教会のアルバイトで山中の墓地まで埋葬に付き添って、疲れ果てていたトトは、墓地からの帰り道で自転車に乗って脇を抜かしていくアルフレードを見て、悪だくみを思いつく。突然、足をくじいたふりをして、まんまとアルフレードの自転車に乗ってもらうことに成功したのだ。自転車で揺られながらトトはアルフレードに「友達になろうよ！」と持ちかける。そして、トトを家に送り届けたアルフレードは、そこで彼の家庭のつらい実情（父親がロシアから帰還していないことや、それゆえ非常に貧しい境遇であること）を知り、これまでもまして目にかけてやるようになる。

『ニュー・シネマ・パラダイス』は過去の映画へのオマージュでもあるので、「ロシア戦線」といえば、マルチェロ・マストロヤンニとソフィア・ローレンの黄金コンビによる『ひまわり』Girasoli (1970)が思い起こされる。まず生きては帰ってこれないであろう父。たとえ生き永らえていたとしても、幸せな再会はもう望めないのかもしれない。

『ニュー・シネマ・パラダイス』でアルフレード役を演じたフィリップ・ノワレはフランス人だが、イタリア映画では欠かせない存在だ。彼の名演が光るもうひとつの作品が『イル・ポスティーノ』Il Postino (1994)。ナポリ沖の小島に住むしががない青年マリオが、ノワレ演じるころの亡命詩人パブロ・ネルーダと出会い、文学や人生に目覚めていく物語だ。



【『イル・ポスティーノ』より 坂道を登るトロイージ】

主人公のマリオを演じたマッシモ・トロイージは、実はこの映画の撮影中すでに心臓病を患っていたにもかかわらず、監督・脚本もこなし、さらには演技の中で、島内のきつい坂道を、重い郵便物を抱えて自転車で何度も登っている。そんな無理が

たたったか、トロイージは撮影終了から12時間後、
映画の完成を見届けることなく亡くなってしまふ。
41歳の若さであった。

(後篇に続く)

[参考資料]

『映画100年STORY まるかじり イタリア篇』(柳澤一博著、
朝日新聞社,1994)

Wikipedia.it 関連情報

(当館スタッフ)

イタリアンレストラン紹介 ~大阪・心斎橋~

イタリア料理 ローザロッチェ

『想いがかたちになる』イタリアの伝統的な調理法をベースとした“幸せイタリアン”

—ローザロッチェが一番大切にしているのは「風味」そのものです—

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)

- ・ ランチご利用時に、パティシエ手作りの「ビスコッティ」をサービス
- ・ デイナーご利用時に、「アペリティフ」
(ワイン・スプマンテ・カクテル・ソフトドリンクより)をサービス

住所: 大阪市中央区南船場2-12-22ハートンホテル南船場1F

電話: 06-6251-6969

URL: <http://www.spazio-group.jp/>

Rosa Rocce
ITALIAN



… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 梅田: 大阪駅前第4ビル
4/3 (水) 11:00~12:30
4/3 (水) 19:00~20:30
4/7 (日) 13:00~14:30

- 四条烏丸: ウイングス京都
4/2 (火) 19:00~20:30

スペイン語 無料体験レッスン

- 梅田: 大阪駅前第4ビル
4/4 (木) 13:00~14:30
4/6 (土) 15:00~16:30

- 京都本校: 日本イタリア会館
4/6 (土) 11:00~12:30



- 京都本校: 日本イタリア会館
4/2 (火) 11:00~12:30
4/6 (土) 11:00~12:30
4/6 (土) 13:00~14:30

ポルトガル語無料体験レッスン

- 京都本校: 日本イタリア会館
4/3 (水) 13:00~14:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>